



ゆたかはじめ

戦後、わずかに生き残った方々が重い口を開き、明らかになったのです。本土では知る由も

2009年6月11日

..ティータイム

今年も鎮魂の6月が来しました。私が対馬丸のことを初めて知ったのは、今から30年ほど前、那覇若狭の「小桜の塔」にお参りをしたときです。戦争末期の昭和19年8月22日、学童疎開船対馬丸が那覇から本土に向かう途中、アメリカの潜水艦に撃沈され、大勢の小学生たちが犠牲になりました。島の戦火を避けるには、敵艦のウヨウヨする中を船で逃げ出すしかなかったのです。

沖縄戦の悲劇は、10・10空襲より早く、もうこのときから始まりました。この事実が極秘とされ、

隠された対馬丸

ありませんでした。今年はいくつかから65年にもなるのですね。それを記念して、斎藤勝監督が「銀の鈴」という映画を完成させました。学童たちの家族や先生を中心に、対馬丸の事件を横から語り描いたもので、軍の厳しい口止めが大きなテーマになっています。物語はフィクションですが、一つ一つの出来事は生き残った方たちの証言が基になっているので、しっかりした、とてもよい作品になりました。

先日、桜坂劇場で行われた完成上映会は満員で、海に沈んだ子供たちの声が聞こえてくるようでした。見終わったあと、深い悲しみの中にもどこか清々しい余韻を残してくれました。近く全国で上映されるそうですから、お薦めします。

(那覇市、エッセイスト、81歳)